

Bevacizumab を含む化学療法が著効した 大腸癌の遠隔リンパ節転移の1例

はやし ひこ た 多¹⁾ はつ とり しん じ 司¹⁾ ふじ い とし ゆき²⁾
林 彦 多¹⁾ 服 部 晋 司¹⁾ 藤 井 敏 之²⁾
こ とう つかさ いがらし まさ ひこ た なか つね お²⁾
小 藤 宰¹⁾ 五十嵐 雅 彦¹⁾ 田 中 恒 夫²⁾

キーワード：切除不能大腸癌，ベバシズマブ，著効例

要 旨

症例は70才代の男性で，貧血の精査目的にて，当院紹介。精査の結果，上行結腸癌，腹部傍大動脈および気管分岐部近傍のリンパ節転移と診断された。回盲部切除（D3 郭清）および腹部傍大動脈リンパ節生検を開腹手術にて施行。病理組織型は中分化型腺癌であり，郭清および生検した全てのリンパ節標本に転移を認めた。術後27日目より mFOLFOX6 + bevacizumab (5mg/kg) を開始。6 サイクル終了後の CT 上，腹部傍大動脈リンパ節転移が消失した。神経障害出現のため，術後125日目より FOLFIRI + bevacizumab (5 mg/kg) を6 サイクル，さらに bevacizumab (10mg/kg) と増量し4 サイクルを行った時点で，FDG-PET/CT を施行したところ，同部位も含めて全身に¹⁸F-fluorodeoxyglucose (FDG) の異常集積は認めなかった。Bevacizumab を含む化学療法の著効例として報告する。

はじめに

今回われわれは切除不能であった上行結腸癌遠隔リンパ節転移に対し，原発巣切除術後の bevacizumab (BV) を含む化学療法が著効した1例を経験したので報告する。本症例では加療経過中に施行した¹⁸F-fluoro-2-deoxy D-glucose Positron Emission Tomography/CT (FDG-

PET/CT) 上，全ての病巣が消失したと考えられた。国外での BV を含む化学療法での CR 例は3.7~6.2%とされ¹⁻³⁾，県内での BV 使用期間が短い現在，14カ月生存中の著効例として報告する。

I. 症 例

患者：70歳代，男性。

主訴：全身倦怠感。

既往歴：50歳代に胆嚢摘出術。40歳代から高血圧（バルサルタン 80mg/day 内服によりコントロール良好）。

Hikota HAYASHI et al.

- 1) 益田地域医療センター医師会病院外科
2) 島根大学医学部付属病院消化器総合外科
連絡先：〒699-3676 益田市遠田町1917-2